

# 誰にも渡さない

---

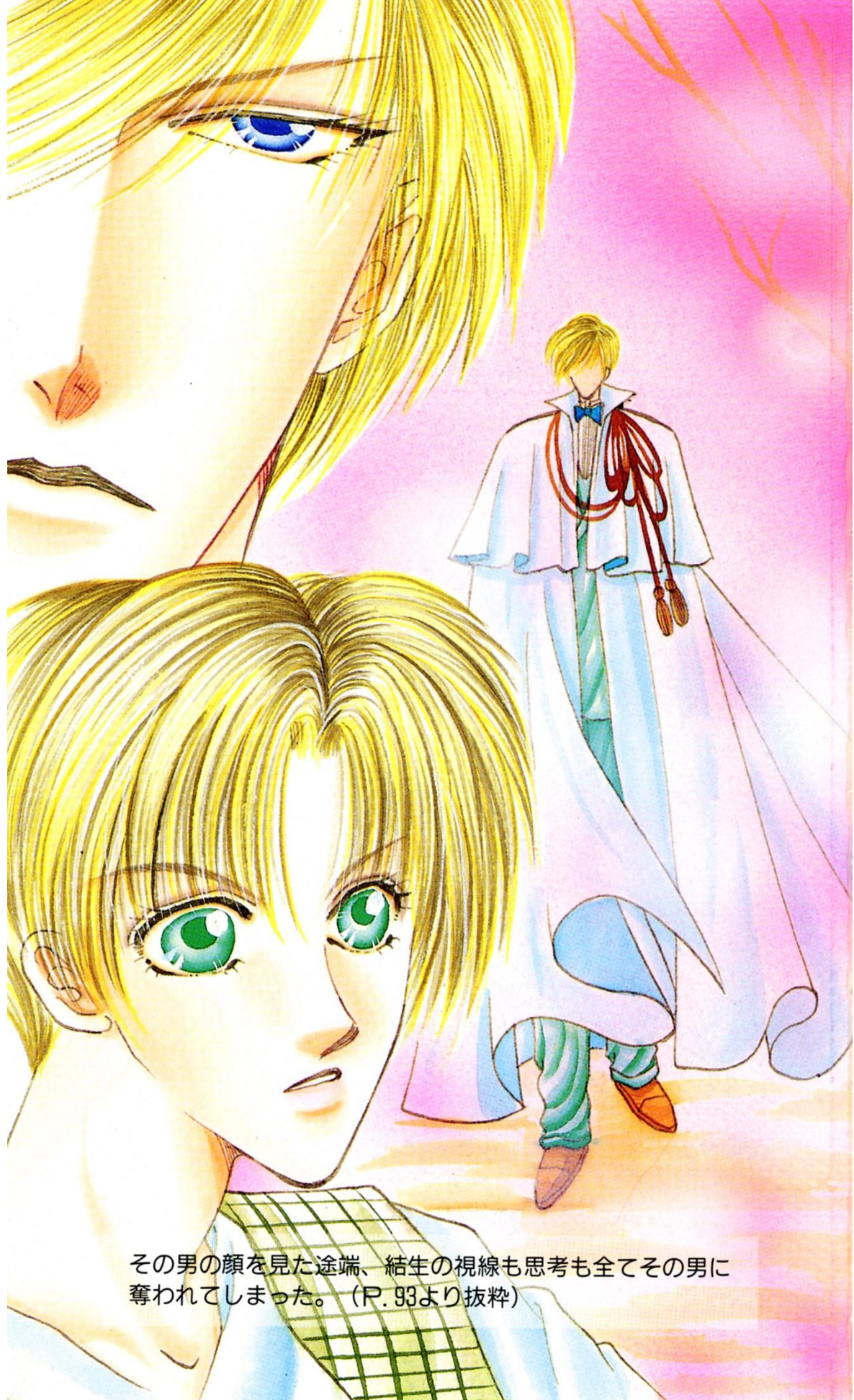
*You're mine.*

金沢有偉



*Story & Illustration*  
*Ariko Kanazawa*





その男の顔を見た途端、結生の視線も思考も全てその男に奪われてしまった。(P. 93より抜粋)

誰にも渡さない

《立読み版》

金沢 有倅

イラスト 金沢 有倅

そう。五主<sup>ごしゅさかえ</sup>栄衛は、この少年と遭<sup>あ</sup>うたび思っていたのだ。

毎日掃除<sup>そうじ</sup>をしているわりには一向に慣<sup>な</sup>れが見えないし、あまりにも箒<sup>ほうき</sup>の持ち方が不器用である、と。  
「掃除をしたことがない私の方が、上手な気がする……」

少年の後ろ姿を眺<sup>なが</sup>めながら、一人呟<sup>つぶや</sup>く。

栄衛は、五主家の菩提寺であるこの寺に通<sup>かよ</sup>って今日で三日になるが、墓石周辺でざっざっこと枯葉<sup>は</sup>を掃く少年に興味を抱いていた。

一生懸命に本人は清掃をしているつもりなのであろうが、多分に間拔けたところのある彼は小石に躓<sup>つまづ</sup>いたり木にぶつかったり。

はつきり述べれば、要領がよくないのである。

観察<sup>あ</sup>していて飽きないほどに滑稽<sup>こけい</sup>だと、栄衛は内心でつくづくと思った。

「わっ……たたっ」

「……なぜ、あそこで転べるんだ？」

少年が平地で転がる様子に、思わず自分の目を覆<sup>おお</sup>ってしまう。

「へへ……失敗、失敗。いや誰も見ていないしっ」

だが、草木に隔てられた向こう側で自分の膝を撫でている少年は、自分のそんな失態を誰かに見られているとは気付いていないようだ。

呑気ににぱつと笑い、こつん、とおのれの頭を拳で叩く。その時着物の袖から覗いた腕の細さは、栄衛の目を何気に引きつけた。

そして転んだ時についた埃をぱんぱんと叩いて軽く落とし、立ち上がる。そして遠目でもその古さが窺える、転んだ拍子に飛んでしまった小さな草履を再び足に履いて、少年は箒を手にした。

「住職さまに褒められるくらい、綺麗に掃除しとこつと。華族さまの大切な菩提寺だし……。先祖のお墓が汚かったら誰だって嫌だもんな」

誰が監視しているわけでもない。少年の本心からの気持ちに、栄衛は胸が高鳴るのを覚えた。

そして自分の存在を気付かれていないことを理解しているので、不器用ながらも必死にざつざつと掃除をする少年の姿を、栄衛は遠慮なくゆっくり観察することにする。

（私よりだいぶ幼く見える……童顔だし。何より初めは女の子かと思った）  
身なりは粗末だが、それでも十分に観賞に堪える可愛い子供なのだ。

零れこぼれそうな大きな瞳は、吸い込まれそうな不思議な雰囲気である。そして、舶来人形よりも綺麗な赤い唇はまるでつくりもののようで、栄衛はそれが動くたびにそこへ視線が奪われていた。

（何歳くらいだろう……。私より、三つか四つは年下のようだ……）

栄衛自身が尋常じんじょう小學校五年生（現在の十一歳）であるから、この少年はおそらくまだ一年生前後であらうと推測する。

とはいえ、就学しているかは疑問なのだが……と栄衛は心の中で付け加えた。

政府は学制を提唱しているが、貧相階級の子供達には学業を身につける余裕がないのが実情なのだ。

そしておそらく、この少年もそんな子供の一人であらう。

垢汚れてはいないが、少年の着物の丈たけはその華奢きゃしゃな体軀からだにまったく合ってはおらず、だばだばである。さらに裾すそや袖そでが擦り切れている様子に、誰かからのお下がりなの判った。

そして少年の小さな足には、引きちぎれそうな鼻緒はなおに擦り切れた藁わらの草履。

「……………」

栄衛は、名門と謳うたわれた五主侯爵家ごしやへんの嫡男ちやくなんである自分を振り返る。この少年とは、身分も育ちも違ちがうのは一目瞭然だ。

声をかけたいとは思うが、そうすることで少年が萎縮いしゆくしてしまうのは想像にたやすい。だからこそ、今までこうやって覗くだけだったのだが。

それも今日で三日。

栄衛の少年に対する好奇心は、身分による遠慮まひに勝る勢いでふくれあがっている。

それは、三日後にはこの東京を離れて五主侯爵家のある千台せんたいに戻らなくてはならない事情もあった。もう日がないことを自身に言い聞かせて、栄衛は大きく深呼吸をすると、ざざと草をかき分け、一気に少年へと近寄った。

「おい、お前」

「ええっうわ、はいっ」

突然に背後の草が音をたて更に人間ひとの声がかかったからか、少年は箒を投げ出して驚いてしまう。そのボデイランゲージは栄衛の予想を遥はるかに超えたものだったので、思わず柳眉りゅうめいに皺しわを寄せその態度に不快感を訴うえた。

「……無礼であろう？ もう少し落ち着いた態度がとれないのか？」

「あ？ ご、ごめんなさ……」

謝ろうと慌あわてて振り向いた少年は、だが、栄衛と視線をあわせた途端に、ぼかん、と口を開けて黙あやまつてしまう。

しかし大抵自分と初対面の人間はこんな行動をとるので、栄衛も少年のこの様子に今更呆あきれることはない。

それより、先程の困り慌わてた様子とまるで正反対の好奇心の表情に、大きな興味が自覚した。

※続きは製品版でお楽しみ下さい。



誰にも渡さない

《立読み版》

発行日 2012年1月27日

著者名 金沢 有倅

イラスト 金沢 有倅

発行所 【MミILルKク—CクRラOウNン】

株式会社水晶院

<http://www.milk-crown.net/>

(C) Arika Kanazawa 2012

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。